

第3回「市長の秋葉区ミーティング」(区民)の概要
テーマ『区ビジョンまちづくり計画の実現に向けて』

- ・日時 平成20年7月28日(月)
午後1時30分～2時30分
- ・会場 秋葉区役所601会議室
- ・発言者数 4名
- ・傍聴者数 30名

【発言】「ホタルが住める里山再生プランについて」

秋葉区には、花や石油、鉄道と同様に、にいつ丘陵というすばらしい財産がある。新津青年会議所では、子どもたちに自然豊かな環境を残してあげたい、ホタルが飛び交う明るい里山にしたい、次の世代の子どもたちが誇れるような里山を目指して活動している。

3月には「守り育てよう この秋葉区の里山」と題して、以前のようなホタルが飛び交う里山環境づくりを地域の皆様と共に考えようと、ホタルと植物の専門家の方々を招きパネルディスカッションを開催した。6月には「そうだ 秋葉山で遊ぼう」と題して、秋葉湖で8人乗りの船や2人乗りのカヌーを浮かべた乗船体験、木登り教室、ツリークライミング体験、里山を散策しながらのトレッキング体験など様々な企画をして、新潟市からの後援、七つの環境団体から協力をいただきながら開催した。子どもたちが自然とふれあうなかで、里山の楽しさ、大切さを肌で感じ取ってもらえたイベントだった。夕方からは総勢250名の参加をいただき、ホタルの鑑賞会も実施した。

また、学校事業の協力として、金津中学校の総合学習が5月から11月まで毎週水曜日の午後から、秋葉山第二キャンプ場で行われている。そこでは里山との共生を考えようということで、自然体験、集団体験、冒険体験をしながら、最終的にツリーハウスの制作を予定している。来年度開催される「水と土の芸術祭」に出品できるようなものを作ろうと子どもたちと共に取り組んでいる。こうした活動を通して、自然の重要性を感じ取ってもらいながら、里山文化を次の世代へと伝えていきたい。

今後は、市民参画による里山クリーン作戦を継続し、ホタルの住める里山整備を本格化していきたい。里山は人の手が入らないと暗くて怖い里山になってしまうので、行政と連携し、里山環境整備を強化して、ホタルプロジェクトと一緒に計画を進めていきたい。特に、新津青年会議所が関わっている秋葉湖周辺には水の流れが少ないため、ホタルの住める水路づくりを提案したい。水路ができれば近い将来、あの幻想的な光を新潟市の子どもたちに見せることができる。また、これだけの自然環境を生かし、学校単位で子どもたちの学習の場、体験授業の場、森の学校として、にいつ丘陵の里山を活用していただきたいと考えている。9月には青年会議所で里山ワークショップを計画しており、にいつ丘陵の活性化に関する提案書をまとめたい。

(市長)

新津青年会議所からは、活発な活動を続けていただき、ありがたく思っている。先ほど秋葉湖を見て、すばらしいところがあるとあらためて感じているが、にいつ丘陵、角田山、多宝山という旧新潟市にはなかった丘陵や山の有効活用を図っていききたい。ホテルの住める水路づくりという具体的な提案があったが、来年度秋葉公園の整備の中で水路整備を行っていききたい。水路づくりは行政が行うが、ホテルを飛ばすためには、市民の皆様の幅広い活動がないと長続きしない。青年会議所の音頭で協力の輪を広げていただきたい。

また現在、総務省・文科省・農水省の三省により、4～5年後には、全国の小学生に一度は農業体験をしてもらおうという大プロジェクトがスタートしている。この農業体験は新潟市内で大いに行っていきたい。農業体験の他に環境体験をできる場として、にいつ丘陵、西蒲区、北区の海岸林の三つ程度を選択肢として、教育委員会とも連携して考えていきたい。

にいつ丘陵の整備については、「にいつ丘陵利活用活性化協議会」で検討しているが、青年会議所や市民の方からも意見を出してもらいたい。また、「水と土の芸術祭」では、8月2日に意見交換会を開催するが、ぜひ新津青年会議所からもご参加いただければありがたい。

【発言】「わが秋葉区 福祉のまちづくりについて」

秋葉区は、高齢者人口の割合が24.9%という現状で、新潟市8区の中でトップとなっており、平成19年度から、地域であんしん見守りネットワーク事業「なじらねっと秋葉」の取り組みが始まった。

高齢者の見守り活動は以前から民生委員、児童委員、自治会、コミュニティ協議会、老人クラブ等で様々な活動が行われてきたが、「なじらねっと秋葉」の活動は、秋葉区で生活する高齢者の方々に声をかけ、お互いに支えあうことを通して、住みなれたこの地域で明るく元気で心豊かに暮していけるような安心・安全な居住地域づくりを目指している。

老後の生活はこの秋葉区でと選んでこの地域に移り住んだ方や昔からこの地で住みよい街にしようと努力された方々など、地域には様々な人々が住んでいる。人が生き、年齢を重ねていく過程ではいろいろと多くの障害やハンディ、リスクを背負う。病気になり、中途障害を持ち、一人になり、「買物も行けない」「ゴミ出しも出来ない」という何かを失いながら老いを迎える。失うものが少ない方もいれば、多くを一度に失う方もいる。多くを失っても、気持ちは元気な方もいれば落ち込む方もいる。地域において、その人らしい暮らしを続けていけるように、その人に合ったいろいろな福祉サービスの提供がある。そういったサービスの一つが「なじらねっと秋葉」である。

この事業は、秋葉区の高齢者の方々に、身近に住んでいる人達や新聞配達事業所などの関係機関の協力によって、声かけや見守りを行い、地域で孤立することを防ぎ高

高齢者自身も普段から地域とつながって、安心して心豊かに暮らしていける地域づくりをめざす活動です。

高齢者が明るく元気で心豊かに暮らせるには、支援する人も支援を必要とする人も、時と場合に応じて、支え・支えられるという広い意味でのケアの関係を持つことが大切だと思う。しかし、活動を通じて、地域の人々との関係が、いかに希薄であるかということに改めて知った。最近できた住宅地は特に感じる。心を閉ざし、強いストレスになってうつ状態になる方も多いと聞いている。だから気楽に集えて、多様な人々の関わりが持てるよう、昼食会をったり語り合ったりなど「幸せの行ったり来たり」ができる条件づくりが必要ではないかと考えている。

これからの提案として、商店の方々がこの活動に参加していただけたらとか、お店の定休日にみんなが集まって会合ができるように開放していただけたらとか、身近に集まる場所があって相談できるとか、街じゅうで人がよく来るような場所を持っている人たちがこの活動に加わってくださると地域資源の有効な活用になると思う。

他県の事例では、訪問したけど返事がなく、民生委員と警察に連絡をとり一命を取り留めたといったケースもあった。数年前に多発していた「孤老死」の防止につながったケースで、咄嗟の判断が功を奏した実例である。

支援したくても地域の一人暮らし・高齢者世帯の情報がわからず、民生委員と自治会との連携を取ることが必要だと思っている。守秘義務等の問題もあって現状はなかなか困難だが、自分達ができる役割や地域の支え合いの仕組みづくりなどについても更に研修を積んで、住民参加の福祉のまちづくりについて、みんなで考え、実行していきたい。

(市長)

すばらしい活動をやっていただき、ありがたく思っている。

安心・安全な暮らしが、81万市民の関心事である。昨年の中越沖地震を受けて、今年度は耐震化工事の前倒しを優先的に行っている。また、災害時に援護が必要な方の名簿の整備も進めている。災害時の要援護者の名簿づくりは、他の政令市と比較にならないほど多くの方から協力いただいている。当面は、この名簿をしっかりと活用できるように、各地域で自主防災組織や民生委員の方などと連携して、リストを踏まえた活動についての具体策を検討している。

身の回りで大変なことが起こっても、それに対応できることが大事なポイントで、まさに皆様の見守り活動はそれをリードする取り組みであると思う。

来年度は「ずっと安心して暮らせる新潟づくり」を大きなテーマとして掲げていきたいと考えている。新潟が政令市になり、政令市の社会福祉協議会が活動を始め、その実働部隊の区社会福祉協議会の活動が本格化してきた。区社会福祉協議会と例えばコミュニティ協議会や自主防災組織、NPO、ボランティアの方と協働した取り組みが各地域で見え始めている。来年度、このような活動がしやすい環境づくりを行っていきたい。地域の茶の間のように、多世代が集うことで情報交換の場にもなる。

子どもたちがドメスティックバイオレンスに見舞われたときには、児童相談所が24時間対応するが、高齢者に対しては、行政として一応の体制づくりは行っているが、児童相談所に比べると大変弱い。それだけ地域の方と一緒にやっていく必要がある。何かあったときにSOSが出せることが一番大切だと思うので、皆様の取り組みを勉強させていただき、来年度以降新潟市全域でそういう取り組みができるように、取り組んでいきたい。

【発言】「コミュニティ協議会の防災・防犯活動と犯罪抑止効果のある青色灯の導入について」

山の手コミュニティ協議会では、自治会へ自主防災組織結成を訴え、防災訓練までの5ヶ月という短期間で関係17自治会すべてで自主防災組織を立ち上げることができた。これは、コミュニティ協議会が音頭をとり、同じ日に、同じ場所で、自主防災組織立ち上げの書類に全自治会長さんが一緒に記入し、コミュニティ協議会がまとめて市に提出するという方法をとった。そして、2年連続500名以上の参加で合同防災訓練を行った。今年度は、各自治会の防災力向上へ向けて、合同ではなく、自治会単位でミニ防災訓練を行っている。

防犯活動では、一昨年10月、不矢代田駅周辺で不審者によるわいせつ事件が連続発生した際、警察と連携を取り、自治会も協力して連日周辺の自主防犯パトロールを行い、草刈や防犯灯の増設といった環境改善にも取り組んだ。また、スコットランドのグラスゴー市や広島市の事例報告から通学路や駅周辺の外灯を犯罪抑止効果のある青色灯への取り替えを行い、この取り組みは、マスコミにも2回取り上げられて、秋葉区全域に広まりつつある。青色灯は白色の蛍光灯に比べ道路全体に光が広がり、遠くの人影まではっきり見え、また、脈拍数を下げて心を落ち着かせる効果もある。防犯灯を白から青に変えるだけで犯罪がなくなるものでもないが、新潟市の安心・安全なまちづくりのイメージカラーとして犯罪抑止効果のある青色灯を防犯意識向上策の一つとして、取り入れてはどうか。

(市長)

山の手コミュニティ協議会からは、多彩な活動を行っていただきありがたく思っている。特に自主防災組織では17自治会で100%組織を立ち上げていただいた。コミュニティ協議会さんと一緒に行くと効果が上がるという一つのモデルケースだと思う。幸い全域で自主防災組織の組織率は向上しており、秋葉区でも結成率が50%を超している。この1~2年で結成率を上げていく方法として、山の手コミュニティ協議会さんの事例を使わせていただきたい。ただ今まで、消防団がしっかりしているとか類似した組織があって自主防災組織よりも広い活動をしていたり、そういう誇りを持っている地域もあるので、自動的に切り替えがいかない地域もあるが、自主防災組織を持っていたら、それ以外の活動はコミュニティ協議会さんに集約していただくとか、地域の特性を踏まえ、実践的な組織に切り替わっていただければありがたい

と思っている。

青色灯については、秋葉区で熱心に取り組んでいただいているが、県警として効果の検証が済んでいないと聞いている。多彩な取り組みを行うことで、防犯への関心を高める効果は間違いなくあると思うので、秋葉区の取り組み、そして結果についても市として把握させていただき、全域でやるかどうか県警とも意見交換したい。

【発言】「矢代田駅の利便性のPRと『里山の利用と開発』を考えるプロジェクトチームの設置について」

矢代田駅周辺には、石油の里公園、中野邸美術館、もみじ園、菩提寺山など豊かな自然と大沢公園、そして温泉施設の花の湯館があり、終日のんびり散策できる。山の手コミュニティ協議会では、里山を訪れた人たちが気持ちよく散策できるように、不法投棄されたゴミの回収作業も行っている。

新駅が完成したことで、駅周辺の活性化と費用対効果の面からも、里山に最も近い矢代田駅の利便性の積極的なPRを市により図っていただきたい。また、新潟市の宝である里山整備開発と多面的な角度からの里山の利用方法を検討する学識経験者などが参加する仮称「市民の里山利用を考える会」といったプロジェクトチームを立ち上げて検討してはどうか。

(市長)

矢代田駅のPRについては、駅が橋上化され、22年度には里山方面の東口が完成することから、それに向けて取り組んでいくことを考えていきたい。

また、秋葉区と西区で先行モデルとなり、新潟市都市政策研究所や専門家と一緒に、区の特徴を発信するホームページを立ち上げた。秋葉区では、にいつ丘陵の里山の多彩な情報を「あきは発 里山冒険王」として、アピール力のあるホームページになっている。また、ホームページのエッセンスをガイドブック的なものにしていくことも検討しなければならないと思う。

来年は大観光交流年として、81万市民が新潟市の宝物を確認する一つのきっかけが「水と土の芸術祭」としてやれたらいいと思っている。芸術祭の方向が固まったら、皆さんから大いに意見を出していただき、取り組みの輪を広げていきたい。全域が参加できる珍しいプロジェクトにできると思うので、それを一つのきっかけとして、矢代田駅からこんな近くにすばらしい緑があって、すばらしい散策コースがあるということを、水と土の芸術祭と連動させていきたい。

【発言】「『にいつ食の陣』への行政の支援について」

にいつ食の陣はこれまで2回行ってきた。今年は全国的にも有名なこの地域の花産業の最盛期と連動して、内外の多くのお客様に楽しんでいただいた。参加店については大手スーパー4社を含む58店舗から参加いただき、5月3日から31日までの月間座、そして6月1日の当日座では多くのゲストの皆様を迎えることができた。今年

の特徴として、地域資源の特産野菜を利用した限定品が多く、それぞれの店ごとのオリジナリティあふれる食を提供できた。なかでも、この地域らしい、食として大変機能性に優れ、体にいいという野菜のプチヴェールを使った食の陣限定の創作料理の人气が高かった。また菓子工業組合として、プチヴェールをパウンドケーキにしたり、ムースケーキやクッキーなどにして販売した。話題性もあり評判は上々だった。また、当日座では、プチヴェール入りのご当地パンの新津バーガーと新津ドッグが、毎年行列必至の人気商品になってきた。野菜というと好き嫌いがあるが、それをお菓子やパンにすることで、大変食べやすく、栄養面でも薬科大学さんと連携しながら、体にいい食を提供していきたいと考えている。にいつ食の陣がきっかけとなって、花産業や農業と連携しながら、この地域をPRしていけたらと思っている。また、食の陣を通して、花や農業、また野菜の健康というイメージにスポットをあて、地域の活力を上げたいと考えている。

一方で地域の商店街や企業でも大型店との競争が一層激化しており、体力のない商店から衰退している状況がある。軒並み売り上げも減少しているという厳しい状況になっている。商店街をいかにして元気にするか、その一つとして食で再生できないか模索している。まずは地域の活力を上げるために、またふるさとの食を発信するために、行政からも支援をいただき、にいつ食の陣をもっと拡大した形で開催したいと考えている。

(市長)

にいつ食の陣では大きな効果が出ていると感じている。今年は花の最盛期とマッチングして開催していただいたことで、食と花の政令市をアピールできると思う。食はある面では健康づくりにいい影響がある。また花は癒しということで精神面でいい影響がある。体と精神の両方が健康であるという新潟をアピールしていくという取り組みを旧新潟の街なかに続き新津で開催していただくことはすごくありがたい。自慢の食をどんどんアピールをして、その旗印に食の陣を掲げていただきたい。にいがた食の陣は長い歴史を重ね、ようやく市外からも定期的に来ていただけるようになり、新潟市全体の活性化にもなっている。にいつ食の陣では、まずは市内の方から新津の食の素晴らしさを知っていただき、やがて市外県外へ波及していくということだと考えている。

新潟市からの財政支援を求められていると思うが、例えば出店料では、にいつ食の陣では総事業費に占める割合が13%程度で、にいがた食の陣では16%と大差がない。にいつ食の陣が育っていけば地域の活性化に役立つことで、総事業費が膨らんでくるのではないかと思う。

来年の水と土の芸術祭を大成功させたいと思っているが、基本的に水と土というものを使って、新潟の食、新潟の花をアピールするという狙いもあるので、にいつ食の陣も大観光交流年を盛り上げる大きなイベントの一つとして捉えさせていただきたい。

また、イベントで人が出たときに、自分の店の売上げがどうなるか、大事なリサーチの場になると思う。それぞれの店の分析にもこういうイベントを役立てていただければありがたい。来年もぜひ今年以上に盛り上げていただき、市としても有効な支援について、一緒に考えていきたい。